

## 死にたいする看護教育

滝沢, 美恵子  
九州大学医療技術短期大学部

<https://doi.org/10.15017/130>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 9, pp. 35-40, 1982-03-25. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 死にたいする看護教育

滝 沢 美恵子\*

Training Nurses to Care for Dying Patients

Mieko Takizawa

## はじめに

看護学生は、臨床看護実習に際して死の近い患者に出会ったとき、不安と恐れを抱き、とまどいを見せる。そのため看護学生は、積極的に臨床看護実習（以下臨床実習）にとりくめない。このとまどいの原因が今迄に、探られたこともないし、死に直面している患者に対する看護教育も特別に、なされてこなかったのが実情である。

この小論は、こうしたとまどいの一つの原因と考えられる社会的背景について検討し、次にこれを踏まえて、死についての適切な教育方法を検討した。すなわち、不安やとまどいを克服して、積極的に死の近い患者を看護できるように講義カリキュラムを立案実施した。特に新しい試みとして、臨床実習前の学生に対して事例学習を取り入れ、その効果について検討した。

この論文は、こうした一連の経過をまとめ、死に関するカリキュラムの効果を分析し、今後の課題を見出そうとしたものである。

## 社会的背景

最近どうしてこうもとまどいを見せる学生が増えてきたのだろうか。端的に言えば、今の学生達は死に出会う機会が少なくなったのではあるまいか。もちろん、テレビなどマス・コミを通しての死を知るが、この死は抽象的である。むしろ現在では、社会全体が死との出会いを減らしつつある。

まず、平均寿命の上昇、死亡率の低下により死との出会いが減少した。日本人の平均寿命は、明治、大正期を通じて低い水準にあったが、昭

和期に入ると伸びはじめ戦前の昭和10年、11年は男は46・92年、女は49・63年であったが、昭和46年には、男女の平均寿命がそれぞれ70年、75年を越え、日本は世界の最長寿国の仲間入りをし、昭和54年には、男73・46年、女78・89年となっている<sup>2)</sup>。

死亡率は、戦後は医薬の進歩、公衆衛生の発展によって低下の傾向にある<sup>3)</sup>。

さらに、核家族の増加は、一世帯当りの平均人員を減少させ、そのため家族内での死が減少している。わが国の核家族世帯は、昭和30年の1037万世帯から昭和50年には、1998万世帯へ増加し、一世帯当りの平均世帯人員は、4.97人から3.48人に急速に減少した<sup>5)</sup>。従って、家族の中での出生や死亡を経験することが少なくなっている。

つづいて、核家族の増加は家族の機能、変化と関連する。すなわち、家族の機能が弱くなって病人が家族から隔離された。つまり共同体が崩れたあと浮び上ってきた核家族は、従来果してきた多くの役割を失っている。それは、労働、社交、冠婚葬祭、出産、助産、育児、教育の場ではなくなりつつある。食事、洗濯できえ外で行われるようになっていく。同じく病人の治療や看護は、病院その他の施設でなされようとする。このため家庭の中で死に出会うことはまれになっている。

筆者は、九州大学医療技術短期大学部看護学科2年生、78名を対象として、死に関する講義を行う前に死についての調査をした。その結果、同居している家族の死に出会った事のある学生は18名(23・1%)であった。

家庭内での死の減少と反対に、病院、その他

\* 九州大学医療技術短期大学部

の施設内での死が増加した。家族の機能の縮小、変化と核家族化は、大規模な医療施設をそなえた病院、診療所への依存度を高めた。多くの重症患者はこうした施設に入院し治療を受け、そして死ぬ。病院、施設内での死亡率は、昭和30年は、15・4%にすぎなかったが、昭和50年には、46・7%と増加している<sup>4)</sup>。

以上のことから、臨床実習時に学生が見せるとまどいは、当然のことと思われ、これはこうした社会的背景と深くかかわっているといえる。

### 死に関する講義の展開

死の経験のない学生達が、臨床実習で死の迫る患者に接した時、適切な対応が出来ることを目標に死に関するカリキュラムを立案実施した。(表1)

対象は、昭和55年度、九州大学医療技術短期大学部看護学科2年生、78名である。

講義の内容は三つに大別出来る。

第一、末期患者の看護の意義について講義す

表1 死に関する講義の展開

	方 法	内 容	ね ら い		
二 年 生 の 前 期	講 義	1. 末期患者の看護の意義 2. 危篤時の徴候 3. 危篤時の看護 4. 死の判定 5. 死の徴候 6. 死後の処置 7. 死亡退院時の看護 (病理解剖・死亡手続)	生命の尊厳を考える 死を生理学のおよび精神的なレベルで理解する。  処置、手続、遺族への理解		
	3 時 間	小グループ討議 および レポート提出	「死」について 死に対する一般論 自分にとって死を意識させ、 死に対する考えを確立させる。		
	夏 休 み 期 間	文献学習 参考文献表を学 生に配布	死に関する参考文献を読む ことにより、さらに自分の 「死」に対する価値観を確 立させる。		
	二 年 生 の 後 期	4 時 間	小グループ討議 末期患者の事例 1. 癌に対する疑いを持って人工肛 門造設術をうけたS字状結腸癌患 者 69才 女性 2. コバルト照射後、大腸炎を併発、 自殺を企てた子宮頸癌患者 68才 女性	近い将来、「死」を免れ得 ない状況にある末期患者の 事例を通して、看護婦とし て「死」にどのように対処 すべきかを考える。	
		4 時 間	全 体 討 議 および 発 表		3. 死の受容過程にある青年期の横 行結腸癌患者 25才 男性
					4. 夫にのみ病名が告げられ、全身 に骨転移した乳児をもつ胃癌患者 36才 女性
					5. 疼痛に苦しむ舌癌患者 50才 女性

る。回復見込みのない患者の看護は従来の看護観には含まれなかった。現代の看護は、患者を回復させるための援助と患者が安らかな死へ向うための配慮という、一見矛盾し合う課題を同時に引き受けねばならないことを理解させる。さらに、この二つの課題がいずれも患者に人間らしく応答することから解決されるであろうことを示唆した。

第二、患者の生理学的および精神的なレベルにおける死について理解させて、これに関する看護技術をのべる。

第三、死後の処置および手続、遺族への理解をのべる。

私達の問題は、臨床実習において、学生が死の近い患者に直面して不安を抱き、とまどっていることにある。この点に関しては、経験豊かなナースも同じであり、それは凡ての人間に共通したことでもある。要はこうした不安にも拘らず、患者に人間らしく冷静な応答ができることにある。だから講義では、単純に学生の不安を取り除こうとはしていない。不安や恐怖をもたず、死の近い人や人の死に無感覚になるのではなく、不安やおびえを否定せず、それを大切な出発点

としなくてはならない。すなわち、学生が死について、他人の死だけではなく自分自身の死をも含めて考えるよう指導せねばならない。

こうした真面目な思索が始めて、学生の不安やおびえを人間の生命の尊さや死の意味への理解に転換できるのである。

このような意図によって講義後、「死」について自由に考へ討議するため、学生達を13のグループに分け、その中で各人が論じ合ったことをレポートにし提出させた。

さらに、夏休み中に死への洞察を深めさせるため、看護学のみならず精神医学、哲学の面から検討された死に関する参考文献の表を配布し、読むよう指導した。(表2)

次に、事例学習を行い死についての知識、理論をさらに深化させ、体性感覚的活動<sup>6)</sup>を必要とする臨床実習にそなえるため、5例の末期患者の事例を示した。事例は、身体的症状のさまざまな精神的問題をもつ患者で、その患者の看護を経験した看護学科の教官が作成した。この事例について、学生に自由に討議させ1週間後に、各グループ毎に学習の発表をさせた。

表2 死に関する参考文献

1. ローズマリー・ブヒャー 著  
赤松 隆, 三村 孝 訳 : がん患者の看護, 医学書院.
2. 深津 要 : 危篤時の看護 (限界状況における看護者の役割), メヂカルフレンド社.
3. 柏木哲夫 : 死にゆく人々のケア (末期癌患者へのアプローチ), 医学書院.
4. R.D.アブラムス 著  
吉森 正喜 訳 : がん患者の心 (世話する人々の指針), 医学書院.
5. リチャード・ラマートン 著 : 死の看護, メヂカルフレンド社.  
季羽 倭文子 訳
6. 工藤良子 : 癌患者の記録 (限りある命をおしんで), 医学書院.
7. V.ジャンケレヴィッチ 著 : 死, みすず書房.  
仲沢 紀雄 訳
8. 寺本 松野 : 看護のなかの死, 日本看護協会.
9. E.キューブラー・ロス 著 : 死ぬ瞬間, 読売新聞社.  
川口 正吉 訳
10. E.キューブラー・ロス 著 : 死にゆく人々との対話, 読売新聞社.  
川口 正吉 訳
11. E.キューブラー・ロス 著 : 尊厳をもって死んでゆくこと, 総合看護, Vol 1, 1972.  
鳥海美恵子 訳
12. 森 欧外 : 高瀬舟, 新潮社.

## 学生の死に対する態度の変化

一般にその人の使用した言葉がその人の理解した世界であるといつてよい。それゆえ、学生が死について討議したレポートおよび事例学習で発表したレポートを検討、解釈することによって、学生の死に対する理解の深度をうかがい、講義の方向をきぐり、その成果を知ることが出来る。

以下その事実を具体的に述べる。

### 1. 事例学習前の学生の態度

「死」についての討議レポートを解釈すると、学生の死に対する態度は、死を一般的に他人ごととして受けとる態度から、他人の死を自分の死とかかわらせて受けとる態度があった。それを両極にして、学生の死に対する態度は四つに分けることが出来た。

1) 「今まで死ということに関して深く考えたことがない。身内の死に直面したことがないし私にとってあまりにも遠い存在に思える。」「死ということに対して身近に感じない。」「私にとって遠いこと、他人の事のように思えて仕方がない。」「人間は生まれてきて生きることを与えられたので、常に生きることだけ考えたい。」とそれぞれ言いながら、「死は誰にでも訪れるものである。」「人間が生まれてきたからには必ず死というものが訪れる。」など多くの学生(61名)は語る。

トルストイのイヴァン・イリイチと同じように学生達も死について語る時<sup>7)</sup>、自分を一般人間とは別扱いにしようとしている。人間は、ただ自分自身を除いては凡て死ぬと考えている。学生のある者は、死は自分自身とは無関係だと思っており、自分の死を信じていないのである。これは学生だけではなく、ほとんど凡ての人がそう思っていることである。根本的には誰も自分の死を信じていないとさえいえる。死は全度が過ぎる程私達にとって異質であるから<sup>1)</sup>、学生達がそう思うのはさしておかしいことではない。一般論として、万人が死ぬことを認めは

しても、自分の死を信じることは出来ないのである。しかし、これ等の学生は、死に対する態度からいえば、初めの浅い段階にとどまっていると云える。

2) 「死のことを考えると空虚になる。死ぬ前に“これで死ぬんだ”と思わなくていい死に方をしたい。」「行き先がわからないから怖い。」「自分の存在感がなくなる。」「何よりも一番恐いもの、今こうして存在している自分があるが、必ずいなくなってしまう事がとても恐いと思う。」「死ぬとは悲しいことです。」「精一杯生きたとしても、それは死によって何も価値のないものにされてしまうような気がします。」

これ等の学生は、死が他ならぬ自分の死であると感じとっている。死は何よりも他人に代ってもらえない自分自身の死なのである。彼女達は、自分の生の凡を無にしてしまう淵のようなものであると考えている。

次の2名の学生の言葉は至言である。

「死とは、誰の助けもかりえない、自分1人で理解していくしかないものだと思います。人間は死ということ、もともと孤独であると思います。」「死は『客観的な出来事』として一見冷静に受けとられているが、本当は第三者として傍観的に自分が見ているだけで自分の死はこの時、同時にとらえられていない。自分とかかわりのない『死』では『死』の真実を切実に感じることはない。」この2名の学生は、1)に述べた多くの学生達よりも死に対する理解が深い。それは、死一般ではなく自分の死を意識内にとり入れているからである。これは、死に対する良心的な理解といえる。

3) 「死について時々考えてみる必要があるように思えてきた。」「限りある人生を自分で選択しながら、考えながら生きている。」「『死』を恐れること自体が『生きがい』になるかもしれない。」「『死』を考えることは『生き方』を考えることだと思う。毎日『これでもいいのか』『自分のすべき事は何だろう』と悩んでしまう。」「人間はよりよい『死』を迎え

るため生きているのではないか？ そのために自分・限りある『生』を大切にしたい。」「いつかは誰でも死ぬのだから、死ぬ直前まで精一杯生きぬくべきである。」「毎日、充実して生きているかを考えて大切に生きなければならないと思う。」

死は生を根本的に規定する、死を自分の死として受けとる学生達のある者は、自分の生を考えざるを得ない。そして、できる限り生を充実したものにしようとする。生を充実するとは、もちろん、他人の生と死に関係し、その関係の中に生きることである。

4) 2名の学生は、充実して生きることが他人との関わりを持つことだと感じとっている。

「死ぬことによって、その人間の評価なりイメージが鮮明に描きだされる。」「死ぬことによって、その人の存在や価値感が改めて見直され、その人をとりまく多くの人々の間に生き続ける。」

この2名の学生は、いずれも個人の死は、共同体の死であること、他人および自分の死が人生の充実の度合いを決めること、そして、その度合は人間の結びつきや相互の生の肯定によることを暗示している。このような理解を持った学生達は、不安ととまどいを見せながらも、死の近い患者のいる臨床実習に積極的に参加するといえる。

以上の学生達の死に対する態度をまとめると次のようになる。1) 自分と無関係な死 61名(78.2%) 2) 自分の死への不安 8名(10.2%) 3) 自分の生の肯定 7名(9.0%) 4) 自他の生の肯定 2名(2.6%)。

以上の結果から多くの学生は、死を一般的に他人ごととして受けとる態度にとどまっている。今後の講義の課題は、事例学習によって、1)の自分と無関係な死(死を他人ごととして受けとる態度)から、4)の自他の生の肯定(他人の死を自分を含めての死として受けとり人生を共に生きぬく態度)へと学生を導くことである。

## 2. 事例学習後の学生の態度

発表されたレポートから、学生の基本的な発言を詳細に調べ、学生が末期患者の事例を通して、死の近い患者の看護に対する知識、理論、技術、の深化の程度について検討した。レポートは、身体的ケア、精神的ケア、社会的ケアの側面から検討され、学生達はその中で、癌末期の痛み、死への不安、それぞれの症状に応じた看護を問題とし、患者が死ぬ瞬間迄一緒にいてあげ、身体的、精神的欲求を満たしてあげることが重要だとしている。また、学生達は患者のニーズに答えるための一般的な法則はないということを知り、「病名を告げるか、告げないか」について「真実を告げるとは、適当な時期に、適当な人が、適当な方法で、つまり患者の本当の必要に沿った知らせ方をする事である。」と語る。同時にほとんどの学生は、「話し合いを進めていくうちに問題がどんどん広がっていくのを感じ、看護のむつかしさにみんな頭を痛めました。」「死にいく人々をいかに看護するかということは、非常に難かしく、話し合いはいきづまるばかりだった。」「特に心理的な問題については何となく行きづまりを感じた。」と語る。

1回限りの全く独自の患者の看護に際して、何をなすべきかという一般的な基準はない。特に死といった深刻な神秘さをひめたものに直面したときはそうである。具体的に何をすべきかは、臨床実習における患者とのかかわりの中で、その都度発見され創造されていくのである。それは、体性感覚に基づいた全体的な洞察から生まれる。それゆえ、学生達が討論の中で行きづまるのは当然で、しかも正しいことなのである。話し合いの行きづまりは、看護に意欲や希望を失わせる事にならない。行きづまりはかえって実習への期待と意欲を呼び起す。事実、学生達のある者は、地域の医療体制、病院内での看護婦の責任、人間の死生観などを問題としながら、これらは、「私達が一生を通じて考えていかねばならない問題ではないか。」と述べる。

死の近い患者は他人である。学生が他人の看

護を自分自身の人格の問題と考えるとき、死の全体的理解は具体的になり、さらに深化したといえよう。

事例学習前は、死を他人ごととして受けとる態度が学生には、78・2%と多かったが、事例学習後では、グループ全体が死を他人ごととして受けとる態度はまったくなく、死を積極的に自分のこと、自分と患者との関係として受けとる態度に変わってきた。

このように、死に対する学生の態度は、「死」についての討議レポートで多くを示した自分と無関係な「死」という態度より、はるかに進歩し、事例学習の効果があった。

### む す び

臨床実習で、死に近い患者に出会ってとまどう看護学生に焦点をおいて、社会的背景をのべた。さらに学生達が死の迫る患者を理解し、積極的に臨床実習を行い実習の成果をあげるため、死に関するカリキュラムを考案し、昭和55年度、九州大学医療技術短期大学部看護学科2年生、78名に実施した。

講義後、「死」についての小グループ討議、夏休み中に死に関する文献学習、さらに、末期患者の事例学習を行った。その結果、「死」についての小グループ討議のレポートでは、死を自分と無関係な死として受けとる態度が圧倒的に多かった。

一方、事例学習後では、死を自分と無関係な死として受けとる態度はまったくなく、死を自他の生の肯定としてとらえる態度に変化したことが明らかになった。

### 謝 辞

この論文執筆にあたって、事例を提出し討議に参加して下さった岡本陽子、瀬川和子、松尾壽子、橋爪禮子、西田眞壽美の諸先生をはじめ、多くの先生方に感謝いたします。

### 文 献

1) E・ユンゲル、蓮見和男訳：「死」20～25、新教出版社、1978。

- 2) 厚生統計協会：国民衛生の動向，厚生 の指 標，28(9)，87～88，1981。
- 3) 厚生統計協会：国民衛生の動向，厚生 の指 標，28(9)，51～57，1981。
- 4) 厚生統計協会：厚生 の指 標，28(5)，19～24，1980。
- 5) 清文社：わが国の現状と課題，日本の白書，318～319，1980。
- 6) 中村雄二郎，山口昌男：「知の旅への誘い」14～17，岩波書店，1981。
- 7) L.N.トルストイ，木村彰一訳：「イヴァン・イリイチの死」，276～283，筑摩書房，1964。